



# 館長だより

山形県産業科学館

令和 8 年 2 月 1 9 日 (木)

発行 館長 加藤 智 一

## 武家社会を支えた「楮紙」と「斐紙」

日本の紙文化は、単なる筆記具の域を超え、政治・軍事・儀礼・日常生活のすべてに深く浸透していました。とりわけ武家社会では、紙は情報伝達の基盤であり、また身だしなみや礼法を支える重要な道具でもありました。その中で、武将や大名が頻繁に用いた代表的な紙が「楮紙(ちよし)」と「斐紙(ひし)」です。両者は同じ和紙でありながら、原料・製法・用途が異なり、その違いを知ることで武家文化の実務性と美意識の両面を垣間見ることができます。

楮紙は、和紙の中でも最も広く普及した紙であり、武家社会における筆記・記録の中心を担いました。原料となる楮(こうぞ)は繊維が長く強靱で、耐久性に優れ、湿気にも比較的強いことから、武家文書の保存性を高め、長期にわたる領地管理や家中の記録に適していました。鎌倉時代、武士が政治の中心に立つと、命令書・訴訟文書・軍勢催促状など、膨大な文書が日々発行されるようになります。これらの公文書の多くは楮紙に書かれ、武家政権の行政を支える基盤となりました。楮紙は比較的厚みがあり、墨の乗りが良く、筆圧の強い武士の筆記にも耐えました。室町時代には、守護大名の権力拡大とともに家中の文書行政が発達し、楮紙の需要はさらに増すこととなります。そして、戦国期に入ると、戦略・外交・内政が複雑化し、書状・起請文・軍令などの文書が飛躍的に増加し、織田信長・豊臣秀吉の政権下で、朱印状や黒印状などの公式文書が大量に発行されています。江戸時代になると、法令・触書・記録類のほとんどが楮紙で作成されました。紙質の規格化も進み、楮紙は「公的文書の標準」として確固たる地位を築くこととなります。武家の家計簿や日記、藩政文書なども楮紙が中心で、武家社会の記録文化を支え続けました。

これに対して斐紙は、主に雁皮(がんび)を原料とする高級紙です。雁皮は繊維が細かく、光沢があり、滑らかで、薄くても破れにくいことから、斐紙は楮紙とは異なる用途で重宝されました。斐紙はもともと公家社会で愛用されていた紙で、書写用の料紙や贈答用の包紙として用いられていました。やがて武家が公家文化を取り入れるにつれ、斐紙は武家社会にも浸透していき、特に室町時代以降、将軍家や有力大名は、格式ある書状や儀礼文書に斐紙を用いることが増えて行きます。斐紙は、単なる筆記用紙にとどまらず、贈答品の包紙、懐紙(かいし)、化

粧紙・香紙、儀礼文書など、「身につける紙」「礼を示す紙」としての性格が強く、楮紙とは明確に使い分けられたようです。そして江戸時代、雁皮紙の生産地が整備され、斐紙はさらに品質が向上します。大名家では、家格に応じて紙の種類を使い分けるようになり、斐紙は「格式の象徴」として扱われたと言います。茶道・香道・和歌などの文化活動が盛んになるにつれ、斐紙は美意識を体現する紙として重んじられました。

現在、米沢市上杉博物館では、国宝「上杉家文書」について紹介するコレクション展が開かれています。上杉家にあっても、時代を反映した特徴があります。

上杉謙信の時代、越後上杉家は軍事行動が多く、書状・軍令・感状(戦功を認める文書)が大量に発行されました。これらの多くは楮紙で書かれています。耐久性が高く、戦場での扱いに強く、墨の乗りが良い。大量の軍事文書を迅速に作成する必要があった時代に対応した選択だったのではないのでしょうか。謙信の花押が入った軍令状の多くは厚手の楮紙で、折目目がしっかりと残っているものが多く残っており、これは、戦場で携帯され、現場で即座に読み上げられたことを示しています。

景勝・兼続の時代になると、上杉家は軍事政権から「文治を重んじる大名家」へと変化していきます。ここで紙の使い分けがより明確になり、楮紙は家臣への指示書、領地管理文書、年貢割付状、軍役帳など、行政文書が飛躍的に増え、斐紙は徳川家・伊達家など有力大名への書状や朝廷・寺社への奉書、贈答品の包紙、懐紙(かいし)誓紙などに使われました。特に、関ヶ原後の会津移封期には、上杉家は政治的に微妙な立場にあり、書状の格式が極めて重要であったと推察されます。

そして江戸時代、米沢藩は財政難で知られますが、紙の使い分けはむしろ精緻化します。楮紙は藩政の標準紙として確立し、藩政文書のほぼすべてが楮紙で統一されます。紙質は厚すぎず薄すぎず、保存性と経済性のバランスを取ったものが多く、藩政記録、家臣の禄高管理、農政文書、藩校の教材など、日常的な行政はすべて楮紙が担いました。一方、斐紙も文化・礼法の紙として、財政難で使用は厳しく制限されながらも、格式を示すべき場面で用いられました。総じて上杉家では、実務＝楮紙、格式＝斐紙、という使い分けを明確に行っていたように感じられます。これは、「武」と「文」を両立させた上杉家の家風を象徴していると言えるのではないのでしょうか。